

生誕、療養時代 大原文学の芽生え

大正元年(1912)

ふるさと本山での療養生活と創作の日々。
大原文学の芽生え。



「婉という女」第13回野間文芸賞受賞 野間会長より表彰(昭和35年12月)



林芙美子からの書簡

東京都久留米村の自宅書斎で



昭和29年初めて飼った愛犬ラディ



和田本町に新築した家
(昭和25年6月)

上京と出逢い 代表作「婉といふ女」

昭和十六年(1941)
結核と闘いながらも執筆を続け、初期の代表作と言われる
「婉といふ女」発表までの苦難の道のり。

昭和十六年(1941)



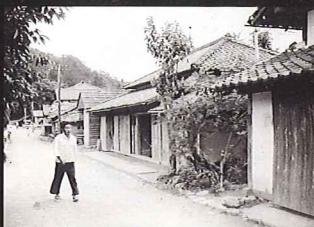
自宅療養中の富枝



吉野村寺家の村道にて
左より富枝(3歳)、母・米(30歳)、姉・雪(7歳)、
異父兄・齋樹(12歳)



吉野第一尋常高等小学校



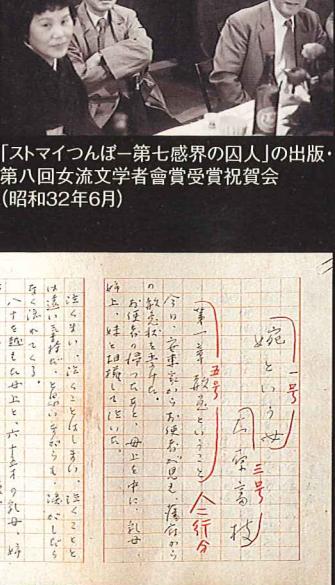
上京するまでの12年間、療養と創作日々
を過ごした吉野村汗見の家



取材ノート「婉をたづねて」



「婉の手帳」野中婉の手紙を
書き写したノート



「婉といふ女」の生原稿



自宅庭にて(23歳)



師範学校1年生の夏休み



雑誌「令女界」に投稿し入賞した
「姉のプレゼント」



昭和13年上半期の芥川賞候補作品
「祝出征」「文藝首都」昭和13年3月号

野中婉から谷秦山に送った手紙

「婉といふ女」の手紙を
書き写したノート

「婉の手帳」野中婉の手紙を
書き写したノート

「婉といふ女」の生原稿

大正元年(1912) 十歳
六月二日 母米死去。
この頃から作文の面白さを知り、父の蔵書
の古典文学に親しみ始める。

昭和二年(1927) 十五歳
四月、高知県女子師範学校に入学。

昭和五年(1930) 十八歳
六月、師範学校四年生の「学期」、物理教室
で喀血し入院。退院後、吉野村汗見の自宅
で十年近い療養生活に入る。

昭和七年(1932) 二十歳
一年間の自宅療養で小康状態に。初めて投
稿した「姉のプレゼント」が「令女界」五月
号に入選。選者は広津和郎。

昭和十一年(1937) 二十三歳
「時雨」はじめ短歌五首が神近市子主宰
「婦人文藝」に短編小説「水雨」が入選。

昭和十二年(1938) 二十四歳
保高徳藏主宰の「文藝首都」四月号に
「渓間」七月号に「おもへや」十二月号に
「十五歳」が入選。選者は広津和郎。

昭和十一年(1943) 三十一歳
「文藝首都」同人に推薦される。

昭和十二年(1944) 三十二歳
「祝出征」を「文藝首都」三月号に発表、同
年上半期の芥川賞候補となる。

昭和十六年(1941) 二十九歳
昭和十九年(1944) 三十二歳
「月帰郷」「野中婉」の書簡を写すため高
知県立図書館に通い、「婉といふ女」の構想
が生まれる。

昭和十八年(1943) 三十三歳
七月、初の作品集「祝出征」を新民書房よ
り刊行。「若き渓間」が「改造」の新人募集
佳作に入選、八月号に掲載される。

昭和十九年(1944) 三十二歳
二月帰郷。「野中婉」の書簡を写すため高
知県立図書館に通い、「婉といふ女」の構想
が生まれる。

昭和二十年(1945) 三十三歳
昭和二十年(1945) 三十三歳
二月空襲しきりの中、新宿区戸塚に転
居。四月十三日の空襲で隣家まで焼失す
るが、奇跡的に焼け残る。八月、同地で終
戦を迎える。

昭和二十一年(1946) 三十四歳
「秋砧」「婉女物語」を「新文學」九月、十月
合併号に発表。十月、短編集「二番稲」を
全国書房より刊行。

昭和二十五年(1950) 三十八歳
昭和三十年(1955) 四十三歳
一月、敗血症で倒れる。四月、病後の療養を
兼ねて都下久留米村東久留米に父と共に
転居。以後、住居の本拠は同地を動
かす。

昭和三十五年(1956) 四十四歳
昭和三十六年(1957) 四十五歳
二月、「ストマイんばー第七感界の囚人」に
より第八回女流文学賞受賞。四月、
短編集「ストマイんばー第七感界の囚人」
を角川書店より刊行。同月十一日、父龜次
郎、心筋梗塞により急逝。

昭和三十五年(1960) 四十八歳
「婉といふ女」を「群像」二月号に発表。
月には単行本として講談社より刊行。十
月、同書で第十四回毎日出版文化賞受賞。
次いで第十三回野間文芸賞を受賞。

昭和三十六年(1961) 四十九歳
三月、高知新聞社主催講演会に上林暁と
帰郷。五月、「正妻」を講談社より刊行。こ
の年、「女は生きる」を原作としたドラマ
「縁」が芸術祭奨励賞を受賞。

昭和三十七年(1962) 五十歳
十月、「川は今も流れ」を講談社より刊
行。同題名でテレビ・ドラマ化して放映。

昭和三十八年(1963) 五十歳
九月、日本文藝家協会代表として、ソビエ
ト作家同盟の招待によりソビエト訪問。そ
の後ヨーロッパ各地を巡り、十月末帰国。

昭和四十五年(1965) 五十三歳
二月、「おあんさま」を「中央公論」に発表。
九月、日本文藝家協会代表として、ソビエ
ト作家同盟の招待により中国訪問。
昭和四十年(1965) 五十三歳
十月、「於雪」土佐一條家の崩壊を中央公
論社より刊行。同書で第九回女流文学賞

愛犬三郎との暮らし、受洗と赦し 大原文学の円熟

昭和三十六年(1961)～

文学活動にひた走り、輝きをみせる創作の数々。受洗を経てたどりいた思想的到達点。



中国作家同盟の招きにより中国訪問(北京人民大会堂にて周恩来首相に謁見:昭和38年)



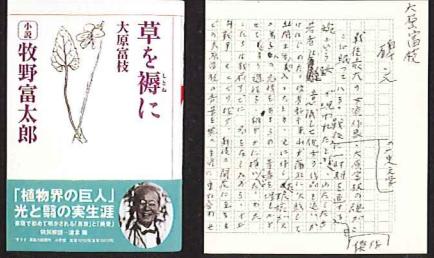
大原富枝文学館落成記念式典(平成3年11月)



恩賜賞・藝術院賞受賞者記念撮影 前列右2人目大原



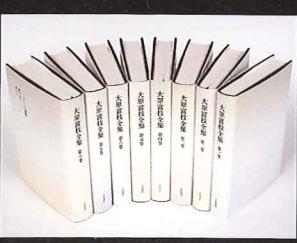
大原富枝文学碑建立除幕式



遺作となった「草を褥に」 吉本隆明によって書かれた碑文の一部



「大原富枝全集」出版記念祝賀会
(高知市城西館にて:平成7年3月)



平成8年8月完成した「大原富枝全集」
1~8巻刊行(小沢書店)



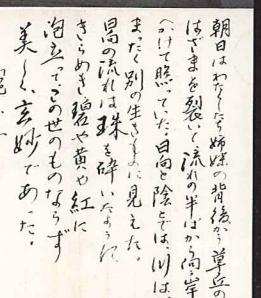
「大原富枝全集」完成祝賀会で祝辞を述べる
瀬戸内寂聴さん(新宿にて:平成8年9月)



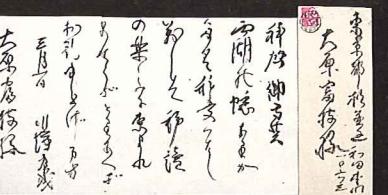
大原富枝文学館の前年に
三岸節子より頂いた油彩「赤い花」
(H580×W500mm:1990年作)

書くことは生きること 大原富枝文学館開館 平成三年(1991)～

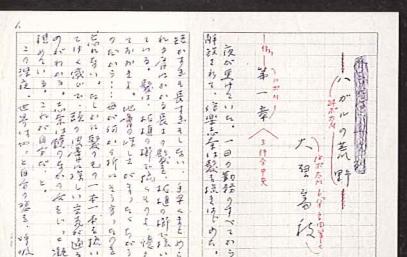
「ふるさと」を想い、「ふるさと」が主題となつてゆく
大原富枝文学館の開館。65年の作家生活の輝き。



文学碑文:大原富枝直筆。著書「婉といふ女」から



川端康成よりの手紙(昭和40年3月)



「ハガルの荒野」原稿(第一章～第七章)



「於雪」土佐一條家の崩壊
(中央公論社)
昭和45年1月刊行



第9回女流文学賞に輝いた
『於雪』土佐一條家の崩壊の
副賞「宝石箱」



一條神社にて(昭和45年7月)



ソビエト作家同盟の招きによりソビエト訪問
(ソビエト旅行日記:昭和40年)



女性創造 昭和46年7月号愛犬三郎と



東芝日曜劇場「アキミ」主演の吉永
小百合と共に(昭和47年10月)



大原の思想的到達点といわれる3作品
左より、「イエルサレムの夜」、「アブラハムの幕舎」、「地上を旅する者」

五月、「鬼女誕生」を中央公論社より刊行。
昭和四十六年(1971) 五十九歳
五月、今井正監督「岩下志麻主演「婉といふ女」映画化。八月、短編集『狐と棲む』を中央公論社より刊行。吉永小百合主演「亞紀子」をテレビ放映。昭和四十七年(1972) 六十歳
六月、「婉といふ女」のロシア語訳刊行。
昭和四十九年(1974) 六十二歳
三月、「眠る女」を新潮文庫より刊行。七月、短編集『ソドムの火』を東邦出版社より刊行。
昭和五十一年(1975) 六十三歳
四月、「建礼門院右京大夫」を講談社より刊行。短篇「視界キロ」を原作とした「霧の視界」を主演星由里子でテレビ放映。
昭和五十年(1976) 六十四歳
七月、「三郎物語」を毎日新聞社より刊行。
十月二十二日、カトリックに入信。中目黒ミカエル修道院で洗礼を受ける。
昭和五十二年(1977) 六十五歳
七月、ギリシャ、イスラエルを旅行。
昭和五十四年(1979) 六十七歳
十月、「信徒の海」を講談社より刊行。
昭和五十五年(1980) 六十八歳
三月、「珈琲館影絵」を講談社より刊行。
九月、「忍びてゆかな」を毎日新聞社より刊行。三月、「地主の妻」を中央公論社より刊行。
昭和五十六年(1981) 六十九歳
十二月、「アブラハムの幕舎」を講談社より刊行。
昭和五十七年(1982) 七十歳
一月、肺炎のため入院。六月、「忍びてゆかな」小説津田治子」を講談社より刊行。
昭和五十八年(1983) 七十一歳
三月、「ハガルの荒野」を講談社より刊行。五月、「イエルサレムの夜」を中央公論社より刊行。
昭和五十九年(1984) 七十二歳
五月、「地籍」を文藝春秋社より刊行。この年、「婉といふ女」のボーランド語訳刊行。
昭和六十一年(1985) 七十四歳
三月、「ハガルの荒野」を講談社より刊行。五月、「アブラハムの幕舎」大原富枝
二月、短編集「巣立ち」を毎日新聞社より刊行。三月、「地上を旅する者」を福武書店より刊行。九月、「わたしの和泉式部」を中央公論社より刊行。
昭和五十九年(1986) 七十五歳
三月、「パンガルの憂愁」岡倉天心とインド女流詩人」を福武書店より刊行。五月、「婉といふ女」の英語訳をロンドンで刊行。
七月、軽井沢千ヶ瀬で愛犬三郎失踪。
昭和六十二年(1987) 七十五歳
十月、「山雲への恋文」を福武書店より刊行。九月、「わたしの和泉式部」を中央公論社より刊行。
昭和六十三年(1988) 七十六歳
六月、欧洲旅行へ出発。八月帰国。
昭和元年(1989) 七十七歳
平成元年(1990) 七十九歳
六月、イギリス旅行へ。七月、「夢の椅子」を中央公論社より、「彼もまた神の愛でし子か一洲之内徹の生涯」を講談社より刊行。
昭和六年(1994) 八十二歳
五月、「風を聴く木」を中央公論社より刊行。十一月、「ふるさとの丘と川」を大原富枝文学館より刊行。「ラ・フランス旅行へ。七月、随筆集「息にわがする」を朝日新聞社より短編集「ノックオフ」を福武書店より刊行。十月、「死にゆく人生」を講談社より刊行。十月、「死にゆく姉」を「群像」に登場。
平成七年(1995) 八十三歳
六月、恩賜賞・日本藝術院賞受賞。十二月、日本藝術院会員となる。
平成十一年(1999) 八十七歳
二月、「大原富枝全集」全八巻を小沢書店より刊行開始。
平成十一年(2000) 八十六歳
十月七日号より連載開始。十月、急性心筋梗塞のため入院。十一月、急性心筋梗塞のため入院。享年八十七歳。
平成十三年(2001) 八十七歳
一月二十七日、入院先の東京都中野区立成病院にて、心不全のため死去。享年八十七歳。
平成十三年(2000) 八十七歳
四月、「草を褥に」小説牧野富太郎」を小学館より刊行。
平成十三年(2001) 八十七歳
四月、「草を褥に」小説牧野富太郎」を小学館より刊行。
五月、「草を褥に」所収の著者年譜を参照。